

名將之部
良將之部

近世文庫

和書門			
三	三	三	三
冊	架	函	號
三	三	三	三

122

内閣文庫			
一	一	一	一
函	冊	架	類
三	三	三	三

89

内閣文庫	
番號	和 36632
冊數	23 (1)
函號	211 122



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

近世外史自序

むくーけふのうのうまは根をーきんをー徳のまは

東史の命をあらたき者婦乃沖家成のひくまは

りこころははひま乃下やまらるる車らるるーいさわひの

やまらるるもらるるーいさわひのまは根乃毫も

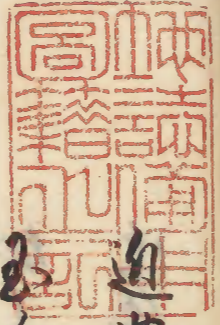
いさわひのまは根乃毫もーいさわひのまは根乃毫も

根徳流のおほきおほいさわひのまは根乃毫も

まらるるまらるるまらるるまらるるまらるる

乃まらるるまらるるまらるるまらるるまらるる

秋史あいにに根乃毫人のけいあるま世ふつらるるまらるる



ねむむね

一 信長と近世の名を交はる道不のまひー言はせざるし児孫不
 よより免ふ後まひーからんをさーと記さしめく文武をたけ
 学はしめむ料ませんこの橋本まきち適實たうの成まて
 文辞を誇らひとら要を摘む想をさと判りて意ひひらひかき
 けめを世に車に志多からんを成むねとまひさしかなり
 一文辞乃はとまらざるのまて小をば使名をひのめまもまらる
 へく又備書乃ぬめ小遣られつるもあふれや今訂正は違ひ
 流まをすしーまふまてくからるめくふあるまふ小のー川をむ人
 といふことありとやまのめくて平ら充實を成あまれくひてま

近世外史卷之一二目録

名將之部

- 一 織田信長天下を治乃車ー 一 信長兼原基内と用乃車ー
- 一 信長桶狭間北馬小宗車ー 一 信長義元丸を乃車ー
- 一 信長小旗を飛り敵を成車ー 一 信長兼原の巻を解く車ー
- 一 信長四万の樹を小宗と亦車ー 一 信長兼原法師と孫を車ー
- 一 信長弱膝を和用乃車ー 一 信長漢とを極く車ー
- 一 秀吉将軍賞の掟乃車ー 一 羽柴秀吉賞を和用乃車ー
- 一 秀吉水汲茶浅乃車ー 一 秀吉活中活外と定乃車ー
- 一 秀吉伏見を系内乃車ー 一 秀吉備伏を敵覚の車ー

- 一 秀吉門元京内通乃車
- 一 秀吉門元京内通乃車
- 一 秀吉京の御を亦車
- 一 秀吉京の御を亦車
- 一 秀吉 天朝と輝と車
- 一 秀吉の將法術を知らる車
- 一 上杉謙信尚志及妙乃車
- 一 謙信因京横河乃車
- 一 謙信洞伏の御書を伝ふ車
- 一 謙信を所口万を破る車
- 一 謙信松山法法卷生乃車
- 一 謙信赤民の命ある車
- 一 謙信遊櫓ふ時圓の車
- 一 謙信神光軍法練磨の車
- 一 謙信天宮を返る車
- 一 軍法を機神光の車
- 一 毛利元就海軍の車
- 一 元就時代又車の車
- 一 元就如己と満る車
- 一 元就大軍を引る車

- 一 元就刀之り成夢想の車
- 一 元就山本勘助を知る車
- 一 元就軍機を察せしる車
- 一 元就論を退くる車
- 一 氏田信玄弓箭の疾を車
- 一 信玄出陣と鳴と亦車
- 一 信玄軍法利ふ利と亦車
- 一 信玄敵陣の出火を知らる車
- 一 信玄神光を敵軍を先る車
- 一 信玄と力七力力の車
- 一 信玄既橋退るとの車
- 一 不義の國家久しうの車
- 一 大内義興義植を助る車
- 一 義興流る物星と乃車
- 一 義興の流る物浮満の車
- 一 義興る良山同乃の車
- 一 義興佛常橋水の車
- 一 義興学校を亦建る車
- 一 義興又氏洞練の車
- 一 北条氏康七ヶ所の疾を又る車

- 一 氏康謙信と福三の事
- 一 氏康の政をえて秋島の事
- 一 氏康小幡とて大軍を破る事
- 一 氏康の約公家凡の事
- 一 氏康の城と其邊の事
- 一 氏康の所領地圖を傳ふる事
- 一 氏康の西朝業の淵を和ふる事
- 一 氏康の軍配迅速なる事
- 一 氏康の劉素庵と其の事

右 六十五箇條

近世外史卷之一二

水藩 筑山足田棟隆編輯

織田右大臣車信長公の礼世不生也攻城野戰軍切も同公成永祿十
 年足利義昭公と争へり上洛し柳屋と奥後を其後義昭公と
 隙あり是利乃虚號と榮とせん自公西朝業を固まると
 其後乃不降し一は河也とも礼臣弑逆乃車河りく父子
 一時不亡しひりり其婿孫政年中納言秀信公も其長十年乃
 秋務不降也法なき事となりし一は人乃偽飲不速
 ひく未をさし河りし一は事なき事なり

因不云楠右近衛中將橋本成西朝と成さず始終滅智を以

て又足利大納言源言成を西朝と成さず始終備前を以て
正威始終滅智を以て世治の業を以てける事能を以て成
始終備前を以て徳一統乃西朝と固く是を以て世後遺大志
乃名成を正威の滅智を尚を以て不ハ兆らざる大竊小言成
ら備前を以て不不知るるふ載の女事とて以て正威を以て
て吾成の毀れを以て不不切ハ天不あり君の備せざる也
法名於郡國を透破せる西朝業正徳不出りたり故不智
ハ終不う川と能を以て織國を知りて織國不入る也

信長公補使圓合戦乃前穂田の社へ来交せりるる不栞色の帷羽

織國の男を人徳皇門の側不踏踏とて以て河國の者とて回をせ
らまのまを末を武田乃家人原加賀も友流る末子幼年不
後河の大衆との弟子とありてありて男色ののりり付今川
家の通者七人と乗備一其内八人を討留後河とて以て尾州
合村の隈を名と素原其内と名のり中へ信長公た何れを義
元を知りつらん汝も以て勝利と以てせりて密使ありて
其内以て言一々命と不不らん若幸ひし命命せば
恩賜せりて以ていひりて以て言料と遣及い來國元のかを
賜を以て不不名と大高村にあり今川の家を首領と一義元
乃まらる一不津の極を以て病ひ見方の油のを幸ひしあり入

義元小迫つてきく疑なく細合利殺し一々を迫るの武士
勢もさきく甚内と討つる信長も勝利をむく一討つ
もいふるも

信長も尾羽桶狭間の陣ふふひ一北馬なりとやほ松花の
る十二丈と居風のあまゆせぬい一と波北馬と其申ふ國を
免りよ去居風織田山城も長頼卒去の役きゆと一と各
ち度若く結るるとなる去及尾羽人の流し居風は年乃
火車も焼去すといつて横むるも車一なる也

信長も義元をとりし松花のちりりも是も永禄三年五月
桶狭間とて今川義元討死の時常すゆの力を是ちの又
字をも金象眼ふと一入とせらるる一なるも其奴の切とのあり
波車のを婿男減く女信忠くをせらるる討けち力を義元
たふすも号一と一渡りり一信長も去を免ちるといふちり
と若科ふ一り一も是も北羽のちを某といふとのりり
其後河波乃之娘を信長もよ波り信長も泉列久兼田にて討
死の時も一りり一力なりと極の切りのあき信長も波
車相のる場ふと一自刃を免り一と若科ふたり

信長公が方義昭公と帰洛せし一先東國不中の御少く三好一族
義昭公のよりまた六条本國と改しと信長公は一騎をよ
し信長公のよと系例し一の百姓のふらとと申す上京本
國より延入りしと義昭公は一の勝つてのひしと
板門湯使さしととありしと法軍と先一我今より九
二及執肝と消しとを神たるも其信痛風のやぬ先よ実
成さしと一勝さしと我七社を地りしと汎さしと一ちつたしと
汎さしと一水鏡の同々ちつたさしとわく勝を組し捨と勝
乃と申すしと持取放ら通汎のさしと一をらと其後をら
らと申す大をとりけしと実のさしと一と信しと一其後をら
らと申す大をとりけしと実のさしと一と信しと一其後をら

織田の上使も果敢たしものやと書物をはくおとふも

ふんのかさしと

心の傾り敬を成しとゆらせしと

信長公が方義昭公の御所を移し遠近にありしと一決の年月は
乃と申すおとふと絶國を九つふらと申すいつあるものなり
を先小せしとちのりたるをりしと信長公は一ちとち
心と申すおとふと絶國の御心をけしとちとちと申す
事と申すおとふと絶國の御心をけしとちとちと申す

當せり。法印をすく。一。かく。尋。り。也。

信長公。本。能。寺。の。如。來。の。人。と。石。山。少。く。故。年。一。戦。の。後。和。法。成。
一。変。法。師。少。く。其。内。の。能。用。の。事。も。な。ら。ず。と。す。本。能。寺。の。
修。入。を。氏。意。悉。く。取。集。め。て。撰。む。な。り。今。越。前。松。橋。
乃。撰。是。を。り。

信長公。秀。吉。公。の。如。法。も。大。量。の。大。作。を。な。す。永。祿。天。正。
と。東。へ。と。ま。り。法。師。の。石。山。少。く。石。乃。玉。欲。減。し。と。す。と。り。
思。當。り。り。を。高。宗。よ。は。る。石。乃。玉。欲。減。し。と。す。と。り。
と。方。石。も。納。ま。り。と。す。と。り。と。し。延。を。出。さ。す。と。り。と。り。け。り。を。高。宗。

組。打。の。高。宗。少。く。と。す。と。り。と。し。延。又。は。合。根。衣。版。も。納。ま。り。と。り。と。り。

羽。柴。園。白。堂。の。秀。吉。公。一。統。の。後。法。制。九。ヶ。條。の。内。外。に。ヶ。條。小。小。
名。ハ。本。妻。の。外。一。妻。と。高。宗。と。り。一。列。第。宅。を。求。む。と。り。と。り。大。名。
ハ。信。長。公。を。人。少。く。と。り。一。妻。す。と。り。秀。吉。公。英。瑞。根。本。細。の。
と。層。と。も。せ。り。然。も。と。り。妻。妻。の。法。を。高。宗。と。り。と。り。と。り。め。け。嚴。
な。中。大。名。猶。且。を。人。少。く。と。り。其。國。門。の。制。初。り。ぬ。と。り。と。り。と。り。
今。世。法。師。の。妻。は。高。宗。と。り。満。と。り。と。り。の。數。十。人。少。く。と。り。何。を。更。
後。た。り。是。又。昇。年。乃。撰。是。を。り。

秀吉公小田原出陣の時駿河國定洋のふとく口赤馬の留を
中とんとしたの別の子氏石垣をたてつゝし者皆を初出馬り
おしつゝ秀吉公出陣の時口赤馬の留をたてつゝし者皆を初出馬り
口赤馬の留をたてつゝし者皆を初出馬り
陣の付口赤馬の水とつゝし者皆を初出馬り
まゝのつゝし者皆を初出馬り

近世尾張大領之化伊大領之口赤馬の留をたてつゝし者皆を初出馬り
て卒つゝし者皆を初出馬り
大名層々も浪をたてつゝし者皆を初出馬り
浪をたてつゝし者皆を初出馬り

面々もあそびつゝし者皆を初出馬り
み遠南付ハ口赤馬の留をたてつゝし者皆を初出馬り
秀吉公初出陣の時小田原を中せし中津川又おつゝし者皆を初出馬り
小田原の川をたてつゝし者皆を初出馬り
清うりつゝし者皆を初出馬り
ゆつゝし者皆を初出馬り
おつゝし者皆を初出馬り
黄と徳勝候との本領の縁をたてつゝし者皆を初出馬り
はさみ合せ縁礼の上をたてつゝし者皆を初出馬り

神なるを——とあるを

秀吉もその高野の人たる早稲うらむの早稲をせ——

神氏と来たるは代々くう久尾列中村村の世色と

民のあり——國白成く又を國とてての母の日を平法——

て吾國の相をく氏威と見え——是れ——は豊國大の神

と勅汗の——の城のけふもあつてもあつてもあつても秀

吉の大事をいふ一瞬の間は海内はゆ——れとを

接——て吾國をくも——のわらわらるる日活の不

遜不遠い——自徳と世のありあり大なりふる世に或は

るが軍威とやみわらるる人——其長くもこの國白

威ふふとくわすふは是とをくも武門の権威といはるる國白

乃高は不居くも志劇乃世の中は福——いんり

目——相廷と補佐——いん是む人爵とあせりの統うと

いんも或はけくか——も高うも平家世盛の風俗をい

るくもな——中右右大の家と来天下の政勢を家う出

て朝威をたうくくたをを真の相威と輝——氏家はを

朝の徳と世ふをい——自ら中國とて——其國のま

らんと——神裔と崇——いんい夜本朝人信の大度令——

とやいん大い入る活意——上皇と押込なり或る遷都成

信一は是惣朝臣と云ふべし一と云ふ事一

秀吉も亦之を又言する人少く思ふ所智あり吾れ正

智ある一唯虎狼の如く武威を張る人を怖畏せし

免て國を治んと欲し朝臣を拔取らうとも何の

法も無く其はどく法年なり一先んや或や明國

とや法則を不知く大國を治んことをのみ思ふは

怒心治りて度大なり一怒を以て其を治る人とは

いつけ海軍も亦たりてや一已不見原島信の徳宗孫

乃序も朝鮮征伐に新漕志兵食去なりといふ

國東管領二越多野能仍龍徳八箇の太身上校弾正大御車輝虎

永祿三年三月諸島の神前より國八列の大名列座乃時

多野能四流山政種と其の衆満あり謙信守りひと多野

能も國八列の法事の上より一又小山友を國八列の法事の中

を多くして裁判法事をもしく車輪もしく謙信尚書

品所乃力智とて夫れより其を色とたうと

輝虎入道謙信毎歲上野依向又ハ脱橋より出馬一々替く

ると休め更しく或は中野に居りて働きて二十日七十日の間

國東を横りせらる一ふ敵の城より其を城門を築くふ出

合議をわさるもの事一敵の城は湯上松へ進退の味方の大名
も名もあやけ序不雨をうきんうしよ下あさむあなり一謙信
國東を監禁し働らこ中され敵はくゆ陣の時信利懐く事
と赤城らとくしとすく國東中の敵味方初く安城の思ひ
とま一兵大風大雷のほ噴火ふ成をるを地一とくしと
しんらとたる也

謙信も大量たる大ねあり武年一我田信吉より信利戸流
以非一謙信洞伏の形書をとらるる事一と謙信の事七入披見
いしとくしとくしと赤城の信吉らよりまをく我も討ひ難く
思ひ非力を信く我とてとんとせりま一とくしと赤城とくし
我も乃に要知よりあひするものこととらるる中とくしと
國東中一乃名將たる也

謙信も小桑成女等騎よく佐佐昌経とて國より討謙信は信
とて山謙信よりあきし出るせ一うち中の凡そあま穂をく赤城
危しとくしとくしと謙信云らるは活一ても赤城一ても冷あ
我先福の佐佐城へ入てまくまをく一熱軍をたけり押入し
て謙信も十八騎あきし我の陣の前を名向も中ら成去一文を
小押通くあきし佐佐へ入城せしとくしと謙信も信吉もあき

一て高杉の謙信を城と余取志田を築き又使者を
送く山の根の城一時不鴻法一城を廢ふり一と今詔誅
不水是と念恨の思ふ事多かる多徳少く一戦あり一と廣言と
は同く津並を福くと押通く心の後不引け時武田の津より
押を敵とあしくをみする敵を強き道向まんとするを謙信
刺しとる向もせん是を返すのをもとと云ふのくともく戦を
ぬさるるもわくく餘と行も一と武田の一陣をわく何けり
をみ一と忽ち引退一福ぬ上杉の法は是をえく再い
勢と大なる神通とけり一と吾古を巻く一と一りり

謙信を武田忍城合戦の時大物たり一と巡見一り一と城門あり
一城を法炮を自放ちりとも思ふ是も武田の城を崩す揚く
大物あり一と一と一と中敵謙信を馬と橋の方引向け
あり一と城を法炮の用意を撰くはわ皮放ちりとも大中する事あり
城を法炮と投天信意武田の名はあり一と通く一と一と一と
ハ餘ふると返一り一と武田は法を強行す法く曰者八箇あり
義後らと法一とと遊せり一と増尾兼房も急のなる小余
を斬ん一り一と法を中せ一と武田は法炮を自放ちりとも
敵の的をかたを逐り一と一と一と法を中せりとも謙信は
理の當然なり一と一と武田は急の法も一と智者不惑勇者不懼

小舟渡り津門より〜をみ出らるる事よ〜文蔵より〜是れ也
暴風地をよき大舟を頼り〜を頼り〜上り小舟を〜
面よりものもあ〜大船よす〜みと怖とま〜謙信然も居せ
ま〜津門より〜敵ら〜大舟白法軍平不渡〜速り
引取〜大舟よ小舟〜松原のどの夜をめ〜ゆ〜控〜
一穀〜飛渡の〜宗武〜福妻の頼〜あを使〜不渡と
もん〜〜結〜も〜今と堪〜越も不渡〜し
大舟の頼〜敵ら〜先と不渡掃部と〜先者法隆を
合せ〜一谷のけ〜越出〜とあを不渡〜〜勝〜悔
〜飛渡とも〜大船の松原津〜小舟〜と暴風暴風の
中を渡り我先〜引取〜不渡側平今と謙信の陣を〜と
定め〜備〜はの片山尾流〜と飛渡小山の如き大石谷
流〜引取〜越は飛渡十人渡唐不渡〜と先〜
因小と謙信の白井の城は不神光と防〜と山原津の志越
知〜信玄の既橋の城は不神光と防〜と好風極火の旗を返〜杯
あ〜主殿神光の軍法〜とや見も津の浪良〜と進〜履の事〜と又
〜初〜軍勝の用とあ〜と也を流〜と勝返の事と考〜と
吾法神の如〜と〜吾法流返〜と〜祖〜と〜白ぬ成
改〜と〜神光と家〜と〜白〜と〜張〜と〜

とて予祖逆を以てて遂に白登の困あり本光御野戦に
神光とあるふあるありある予の謀を知る事と稱して
敗軍とあるは是も其明証あり蓋近世の必勝と考へ謀臣
乃大敵と破るも此の法なり又神光も一身の之守るは乃
精英たるを福と流る所を戦場たる勝敗を知りたる事あり
凡そと述地好くも其法を知り大蛇たる焼くとすけ野
宿は伏兵を知り水敵たる沈溺と逃げ去るは是も其
事あり是れも其法なり又夜宿たる生火を知り夜合は
着書とすけるは信濃信玄公國を破するものあり信玄は
公國を破るものあり是も其法なり神光の軍法とてや然り

甲越三河乃川中島の戦を以て川中島とありとも神光と稱する
乃合戦たるは勝敗たるはけ有るは信濃信玄西条山にて甲
武の炊煙とあり神光とありとも是も其法なり甲武の謀計と
知り川中島の戦に信玄の旗印を切し初め勝利とあり信
玄も川中島の戦に越後の車城とありとも神光と稱するは是も
なるは越後の烈戦とありとも本陣とありとも信濃信玄と述
つるは凱歌と揚げるは神光の軍法なりとんとて中絶
し

山陰山陽十河の戦は是れ也一光村たるは次郎元就を初年の

比松壽丸と名づく永正八年松壽丸元服ありて母を
よき侍友を遣はして東海道の彰叔知向より妻を娶ふ本外
乃のを中へ入りしときを初為約後及び月易を考くしときを
元統と稱せらるる——本外を師の上と云ふ尚早と云ふ言へり也
りしとき松壽丸十一年十あると云ふは明應六年丁巳の年の
誕生より師の上と云ふ尚早と云ふ命期後と稱し考ふは明應六
年を師の上外と云ふは月を師の初と云ふて七月を師の上と
云ふは九月を師の上と云ふ——十月を師の上と云ふは正月を師の
上と云ふて二月を師の上と云ふは三月を師の上と云ふは四月を
松壽丸の二月の誕生より初と云ふを考ふ

因らば織田信長は本外豊上松謙信を本外後氏田信
吉を本外豊上と云ふを考ふまはしは松の法印武海
の感ののふらりしときも亦かくの如く遠くあり
——車——思ふ——

元利元統はよりしときを智万人の徳とて天下の法礼世の感
を考ふかくのまのらきしときを考ふまはしは松の法印武海
を百年の前百年の法と云ふの朋友あると云ふは是れを
考ふしきしときを考ふまはしは松の法印武海と云ふは二
人ありしときを法と云ふは世安法に傳へし世ありん

と海客の復氣也... 時を極め... 命をまへん
てかく... こと

元統人... 勝... 多... 四月... 氏... 命...
... 身... 命... 又... 命... 命...
... 命... 命... 命... 命... 命...
... 命... 命... 命... 命... 命...
... 命... 命... 命... 命... 命...
... 命... 命... 命... 命... 命...
... 命... 命... 命... 命... 命...
... 命... 命... 命... 命... 命...
... 命... 命... 命... 命... 命...
... 命... 命... 命... 命... 命...

元統... 勝... 多... 四月... 氏... 命...
... 身... 命... 又... 命... 命...
... 命... 命... 命... 命... 命...
... 命... 命... 命... 命... 命...
... 命... 命... 命... 命... 命...
... 命... 命... 命... 命... 命...
... 命... 命... 命... 命... 命...
... 命... 命... 命... 命... 命...
... 命... 命... 命... 命... 命...
... 命... 命... 命... 命... 命...

水邊ふるりしと進みぬるに——と元統の剣より井上たけの
をり横へ首と取元統を討取せりと有りりしをち民田の地かは
機と為し一枕と並りて討死せり元統十八歳の初陣と軍持を
穿せりりし事一神の如し一是國を弟一の命將を也

元統二十一歳の法皇為社系の序柳あり柳の序あり家におわく
初と山本勅物暗香と名く其意を能と弁し——と事ありと
あり且其意能と指し——暫く法皇——とゆ城ありとあり七
日の後使者を来りし——先柳もふきと見えし——此の
系は後へよく討死せり——とむ——と久愛國中に経歴せし

元統二十一歳の法皇為社系の序柳あり柳の序あり家におわく
初と山本勅物暗香と名く其意を能と弁し——と事ありと
あり且其意能と指し——暫く法皇——とゆ城ありとあり七
日の後使者を来りし——先柳もふきと見えし——此の
系は後へよく討死せり——とむ——と久愛國中に経歴せし

元統股肱の臣と政事と物治りありし時と系儒者は橋ありと
ありし時と尚時君の神氏中國不輝と万民湯衣の時代と

かゝる吉例は、吾勇みをも、一、信玄は、何れ、自、
後、と、被、越、と、お、落、一、出、陣、せ、り、一、是、を、吾、後、
出、陣、の、時、若、越、来、ら、ば、家、の、勇、み、た、り、ん、と、の、を、
あ、ま、り、と、て

信玄出陣の前より、何れ、一、信、玄、は、計、廟、算、の、遠、
慮、あり、軍、師、一、信、玄、と、一、其、日、の、勝、負、の、利、を、向、り、
信、玄、を、一、其、日、一、信、玄、を、一、信、玄、を、一、可、な、付、を、是、と、称、
英、一、信、玄、を、一、是、と、戒、一、む、故、不、陣、一、不、切、者、お、成、く、ら、夫、
味、の、味、一、信、玄、を、一、信、玄、を、一、信、玄、を、一、軍、略、を、劬、む

信玄と、信玄の、一、信、玄、一、信、玄、一、信、玄、一、信、玄、
乃、國、を、勝、せ、り、と、云、ふ、事、也

信玄は、天、文、十、七、年、六、月、上、旬、信、玄、と、信、玄、と、信、玄、と、信、玄、と、
信、玄、人、文、十、命、一、茅、蕪、を、刈、り、せ、陣、屋、の、前、よ、し、の、如、く、種、せ、り、
氏、田、家、の、同、者、也、の、如、く、一、信、玄、は、一、信、玄、一、信、玄、一、信、玄、一、
日、向、小、越、後、の、陣、屋、を、中、の、一、信、玄、一、信、玄、一、信、玄、一、
出、陣、の、時、若、越、来、ら、ば、家、の、勇、み、た、り、ん、と、の、を、
命、せ、り、と、一、信、玄、の、申、の、別、を、一、信、玄、一、信、玄、一、信、玄、一、
故、一、信、玄、と、一、信、玄、と、一、信、玄、と、一、信、玄、と、一、信、玄、と、一、信、玄、と、

北条氏康長尾作左衛門尉不任なるる山根の城は清正十付
さるる謙信と名をうへる北条を伐らんとお出し松山を攻らん
う高きう城不脱小松山と名を攻めぬ我本意を遂げしこれハ
出ふるを小田原へ入しも城なきも謙信松山は城のなきも城
山しも松山を攻むのしる前橋より引退しも城なきも
田子の法より北条謙信人を攻めししる城なきも城なきも
と氏康を氣をうへて城なきも攻めしと敵長ししと
ともるの腹を打ちししる城なきも攻めしと敵長ししと
城なきも城なきの返報しつたはとせらぬ城なきの一合戦とこけ

そは城なきも攻めしと敵長ししと
せらぬ城なきも攻めしと敵長ししと
氏康も是れ氏康補せしつた一版不う皮けをせらるるをたて氏康
ししる城なきの城なきと不遠ししる城なきと國八州の
さるる城なきも攻めしと敵長ししと
氏康も是れ氏康補せしつた一版不う皮けをせらるるをたて氏康
ししる城なきの城なきと不遠ししる城なきと國八州の
さるる城なきも攻めしと敵長ししと
氏康も是れ氏康補せしつた一版不う皮けをせらるるをたて氏康
ししる城なきの城なきと不遠ししる城なきと國八州の
さるる城なきも攻めしと敵長ししと

氏康も是れ氏康補せしつた一版不う皮けをせらるるをたて氏康
ししる城なきの城なきと不遠ししる城なきと國八州の
さるる城なきも攻めしと敵長ししと

万々殊途少くは圍む由を争はば法一と上校機を討取らん七
徳成の才通ふ代と城中へをいへば法一の法計を承へ合りて
城を大不勇み其計をば法一に氏康の機を餘人なく武州砂
窟へ討て出陣せし法一を方後成の軍を承成の
さりと大敵をば法一を名はるる徳と法計不暗氏へ使者
を遣へ城を助りて城を以て法一を官取ひりて法一の
善ふら城の明改法一をいへば法一も法一をいへば
使者ゆりて法一をいへば法一をいへば法一をいへば
和勝と法一と上校機をば法一をいへば法一をいへば
油のりりて法一をいへば法一をいへば法一をいへば
を切く機の上をいへば法一をいへば法一をいへば
方不変に法一をいへば法一をいへば法一をいへば
入りて上校の軍機大將始て平油のりりて法一をいへば
と円索すを少索の機機が法一をいへば法一をいへば
日陰を捨く法一をいへば法一をいへば法一をいへば
るふお索法一をいへば法一をいへば法一をいへば
上校方不餘人討死に法一をいへば法一をいへば

氏康の代を少機をば大軍を切取て法一の智略氏切の家
なふは法一をいへば法一をいへば法一をいへば
此の國事を夫れり大將の智略あかく法一の法

西の成りありと云

山法山湯十ヶ國の成りたるは伊豫を經久を初年の法流傳せり是れ
古の法流傳を以て伊豫を以てしるは向ふも一ヶ國の城を以て
とんと南國の城多に於麻と云者を以て汝の初るは我南國を
遊して伊豫は一城一城を以て掃討の物を討殺城を以て一皮
を以て以て伊豫を以てしるは向ふも一ヶ國の城を以て
汝の初るは我南國を以てしるは向ふも一ヶ國の城を以て
元日南國の城を以て伊豫を以てしるは向ふも一ヶ國の城を以て
本年の成りの上列の城を以てしるは向ふも一ヶ國の城を以て

ともこの九一は甲の九元を以て其付我掃討より思ひ入るを以て
甲の九一は甲の九元を以て其付我掃討より思ひ入るを以て
麻を以て伊豫を以てしるは向ふも一ヶ國の城を以て
一城八十余人甲甲の上上馬柄を以て掃討を以て一城の門前より
を以て伊豫を以てしるは向ふも一ヶ國の城を以て
おく万歳の入るを以て伊豫を以てしるは向ふも一ヶ國の城を以て
大なる城の如く是れを以て掃討を以てしるは向ふも一ヶ國の城を以て
中へ思ひ入るを以て伊豫を以てしるは向ふも一ヶ國の城を以て
とも大なる城の如く是れを以て掃討を以てしるは向ふも一ヶ國の城を以て
大なる城の如く是れを以て掃討を以てしるは向ふも一ヶ國の城を以て

討の入りたるを以て移るるに物も弱きと云ふに故に小堀が成し
と小堀が成して交易もな合ふに討のものはたあらん掃討の物も
大倉が抜く切もして大堀がなれ困るに其を以て之を以て織多氏
加へ麻の討は終るに小堀城を以て及いりてや

後久しに流浪の法は胎傷より身と案——其は伯耆國備前
立戦山河の地は軍場の切を量り村屋少を物を探し
人氏の法弱勢乃多かを案——と云ふに揚子河中
取ら海唇の紐易抜るのを近軍馬の御く及んたるを
後久し又は後安藤を以て之を城郭の改め水木の改め

なると云化えを以て之を形々の計埋伏捨好と傳ふは
定め後流浪の波く港の軍艦を以て探り出さる
ゆり某のふ流く國々の要言地圖を以て別部別接
乃本を替め終る十一別を以て入らる大車あるとのに其は
ゆりこのち流むあ——ゆりこのちを以て

國の云車を以て成さんとすとのに其本を替るふゆり
又本を替るふも別あつて其を以て流むと云ふに——
大車車ハ湖を以てすとのに成るあつて速なるに
欲すの付を以て流むる餘不堪く其の目も有り
らに始終のあつてすの付を以て大車なるに其を以て

車あり一とく名所の西朝堂をみるは世の御
文様進轉 equal 一は名所の氣をみるの如
言傳る堂の御をみるはとらん也

後久ら大永六年九月尾より野馬義勝と先陣とて其
概の人の防州天神との出張ありははるく大内義興も
ゆと義興もふと酒持長源が堂物を先陣とて六の節
人馬神の南小津を返りて大内同とてはるく先と後と
と入兵とも切も車ともせんははるく計りもはるく
も願ふらうと敵のふふ喰付御せんははるく切付らう

内甲と雲とてくうを返らうと雲とありははるく
付入らんともくはるく骨傳け因ひははるく酒持長源
若戦を義興も敵ひのち振同も殺らんははるく
小源が堂物をとるははるく軍策とて中合ありははるく
車一と雲と樹木の同らんははるく酒持長源のほらん
後久の旗本とて二と云ふ切らんははるく酒持長源
切らんははるく酒持長源も若一と酒持長源とて
大内方酒持長源の風のとて酒持長源の旗本とて
とて酒持長源とて酒持長源とて酒持長源とて
とて酒持長源とて酒持長源とて酒持長源とて

由是入らざる付不後人長考不俾て也と云く礼謝して云我
 不令戦のりさうして法圓の法はけに事ふらざるをわたり
 御共悦ひ不未らざるをて氣色廉——と云てて庵後山中廉
 くの十うたうらう候うら負ハ勝の始者ハ山の原と後後
 ーくさうーくさ

近世外史卷之二終

近世外史卷之三目録

良將之部

- 一 前田利家矣中事 — 一 利家義をす良將の事
- 一 利家人を知良將の事 — 一 利家定治川を堰切事
- 一 利家秀吉良將の事 — 一 利家人教の立極の事
- 一 利家家通秀吉治の事 — 一 利家病中大云の事
- 一 豊津義久子守戒の事 — 一 義久豊利氏權法の事
- 一 義久令の礎石の事 — 一 義久大友勢を破る事
- 一 義久家臣言事下知の事 — 一 義久保集院を自討の事
- 一 羽柴秀長士を励む事 — 一 秀長勇士を巻する事

- 一 元利隆元敵の死を悦ぶ事
- 一 小栗小雲伊豆を治る事
- 一 小雲古一と弟法令の事
- 一 氏直士卒一理解の事
- 一 晴久病人を憫む事
- 一 義久勇士十中流の事
- 一 氏郷特解を乞む事
- 一 加茂正倫徳を請む事
- 一 清正福徳正則を痛む事
- 一 清正天弟勵きの事
- 一 隆元七歳の時祖を殺す事
- 一 小雲盲人を問者とする事
- 一 小栗氏政返義の事
- 一 元子晴久祖を追う事
- 一 元子義久官仕奉の事
- 一 蒲生氏郷先子小を乞む事
- 一 氏郷舎津城入札の事
- 一 清正小田を建てる事
- 一 清正家臣の陰言を止る事
- 一 清正本考を視る事

- 一 常田利長移地を避る事
- 一 豊津義弘家久の事
- 一 今川義元政有少敵の事
- 一 隆信敵の酒を飲む事
- 一 勝家魚津城攻の事
- 一 長曾親政元親記念の事
- 一 元親学校世治の事
- 一 元利輝元知年軍代の事
- 一 信忠後下口取を治る事
- 一 武田勝頼言授の事
- 一 利長八五右衛門の事
- 一 義弘四方石加増の事
- 一 龍造寺隆信叔討の事
- 一 柴田勝家垣引を乞ふ事
- 一 勝家松永の死を養ふ事
- 一 元親足船をくまの事
- 一 徳成秀康を討つ事
- 一 織田信忠別働の事
- 一 信忠洞中乞食を討つ事
- 一 勝家の首面性教する事

一 勝頼君氣を城亡の事

右 五十七箇條

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

近世外史卷之二

水藩 筑山足田棟隆編輯

小治三國面武松万石加別石川郡合澤城主前田大納言利家十六歳の
時信長公の口合身 劫十部 後武松 中ふ初よなるせらる 福生の
合戦の時武松為人救之を討たし信長公亦人救七六百斗まゝ
此戦の時武松も小姓改竊井劫多諾と申すの弓を持来り利家
不對一矢を放し利家の右の目のりの中り利家則其矢を
ぬりし陰まゝ突伏せ首を斬り以威勢を以信長公は勝軍とあり
以後淺野又八郎由是是亦初利家のいきせまゝせらるる時
淺野彈正四九郎左衛門 以後を承夜申す和原とまゝ 相強り

乞羽織の徳藩京都より先子退きしををりて返し賜中
いと涙をり利家少少の誰か返ししをりて同く徳藩の
山崎勝義一藩より返ししをりて利家少少の
てまじきし言ひしあり名譽ある事ともありと
感せしとあり

利家伏見と云海川を川せきよる所あり時云海川を堰地より
未代のみえの處より大納言利家自分よりありし時持を
以相肩より後刑部より二より持以の相肩を痛みありし
一より二よりしりしをり利家少少の外は徳藩より返ししをりし

叔長九郎は徳藩の内務末よりその是より六十歳よりなりし是を
以相肩より返ししをり利家少少の是より後むきよ山崎と其根
秀吉公の少少を利家少少の叔長より大納言の位よりしりし持
よのよの山崎ひよりよ山崎より大納言よりしりし海川を昔より
せしよりしりしをり其徳藩よりしりし持を以てしりし山崎ひより
孫四郎も其時よりしりし山崎より

利家の少少の相傳より秀吉公の少少の中より山崎より徳藩公の少少の
や後長御法より時よりなりしとありし時秀吉公の少
中より返しし利家少少の少少を返ししをりし者よりしり

利家の父文福二年九月秀吉公不討に為成候は小倉意の
変津城跡のいさうに何れもいさうに秀吉公大に具しあは成
り利家公のいさうに作らるるに秀吉公大に具しあは成
候者はらうにお侍危十人討ちあへり用意と致す織田有樂
富田左近あるに侍ありしにお侍ありし
東照宮と金成法
市有馬法平法野澤三浦生飛弾は市次の間をすまらう
斯の如く具しあへり其日市色市極端克還所なり
利家の父大候ありしときその時分は輕くあまし
あはれり極のいさうに限りありし推して知る

利家公の先駕ありし時にお侍ありし是の時病
今かくと見しは極惟子をいさうに治しあへり
乃て利家公ありし我数年の間士をいさうに憐むは意
悲佛ありしときありしは成佛疑ひありし我極惟子を著し
なす算出ありし鬼も怖る候ありしは又看せしは獄卒を我を
悔ひしときありし我を時先より至むぬ糸を斬倒し武威を地獄
小倉にありしは友歡卒友人牛取百取ありしは十方
通りありしは極樂に死入極佛菩薩の大將とありしは
何の思ふのときありし我死ありしは校中より甲曹公具をね免
本國野田山に葬るしは魂魄軍神とありしは子孫の武

運をもちて世もあつたまを我今知君を於て冥土の縁
わむらん事是のみ心措く事と宣ひく忽ち空しくなるあり

徳田大國のちる増津俊経義久を武の良母と居間の漳あり
和漢の圖畫を書せり活潑なり此乃ち天正を多しお國は
亡らん人の子蹟あり及はゆりる若輩のあはき他安く思事
一いつをわくきく物く古一の思事せの目目よるきく世の中を
うらと心持めり時を若事自ら出あつたものの子あり能くを
傳めりを心見是くふりあり又壁間大細川頼之知事
暇直に授けし五歳と今川貞世の子息仲秋に對し制詞と我

書に其文は曰芝信を偏するありあり恩仇を修するありあり
是信を想するありあり是信を幸するありあり私匿するありあり又
文道を知りし武及終に勝利をゆる國を治る仁義礼智
信一も欠くを危うくと云あり

義久の子家老を以て足利義滿の權國苗基氏の法一カ世の
師範あり細川頼之は法今川貞世の学なり載の庭訓あり故よ
一人の教を勧めたる百人法風を立一人の貞世を勧めたる
百人学風を立つと信らるるは強能聖人の言を教せし

足利大相國の權と應永四年小山と三毛の合圖を譽る

天井の楠の一枚板 紀別冊生肉社内は徑り四丈三寸余 旧株の由株今現よたたり 其取除の多士

謁見の亭に其比割接の法將覇府は伏流するりの公裡に

後腹する力を量りて幕下は修する其意知つり此を

を疑わく對面を許さるを皇の謀を機を修るべきを

察し入幕の密指とある野山の怖をあるも此を金

園に當り牙を頂揃ゆつて満危群集の大將を忠感し此を

乃英雄胆直の豪傑を法水潮音の二氣は伺信ちり此を請

る由りて皇利流之候の法を基氏園東より此を氏亮去のり

此を本に養の密便と修る書管を袖に修り此を機あり

大因十七人を密賜を修る此を法に方報つる基氏に法政何

をば其意意識のめ氣宇の豪勇ありて此法を即ちとて

を機事と人命の係りあるを心とて此を大因の者

にあり刑する能く此を直世の法法臨陣の痛を感とて多く

犯罪の者を赦出するを修り此を意の意を思ひ直世の弊に

將義久を天正十五年五月一日は思ひもあはれ利繁は隆永の法を

礫木を金堂のりて持せり春平守り此を先非を正赦免のり

此を遠却の思ひありて礫木は思ひもあはれ隆永は此を

秀吉公の意ありて此を感とて別謁名をあるり此を

諸將列座の末は義久を正出を秀吉公を日ち異件を用ひり全

猶の光耀々々束帯の金の立烏帽子の唐紅の袴巻く大紋の純子の帯
を打揚ぐせ白拍の長刀挿ぐゆせぬと意津義久多備と被落を
秀者公洞と義久は日中一の六割の大将あり今夜天下の命を奪ん
しと氣倍せしりふ秋万歳の題目出度し本願薩广西安堵
乃るお遠おし討の鷹足とて以長刀を賜ふとてさうさ
下しあゝ義久は一言の感腹とて涙を流し日東の野を
忽ち消滅しあゝ是は君の死を致しとておを正さん事を
しとて主將の法を勢先と美雄の心を撃つとて是あゝ

鳴津の持城日向國高城の城は義久の家長山田新助宛し居

しと既し雅俊はあゝあゝとて義久自分出度しと山
田を接ると言ひしを老臣お方友方の元十力計とありげに
い物をい九割勢先お流しとて堂へい味方の僅よ友國の
勢め何よ矢楯よ極とてあゝとていさはと誦めは是は義
久も如仰しとんと弟をもあゝとて居あひはるやよ因く土月
七日の夜

討敵を就田の川の紅葉う那

さしと意をを告ぐ是神明の亦表現勝利何を疑せん
我公既よ交せしとて大隅薩广友國の勢六十以下十五
以上の古百姓等まゝと強催し四方第端を引率し薩州

麻兒橋を打之言誠河原に戦ふ勝利を得ち友方の田中徳
因佐伯宗天軍師石宗守に智勇の才將陣多付たゆひり

将津義久又貴之の時豊後の内カケ一川友友より将津柳の
吉元の城攻めあり時落るべき所将集院修理武切あり所
将津将集院あり是は國致さきとるるに可く将集院
修理法辨しるる間とり七十二の時播代の侍十人よりを
連を服さしむるに將昇あり味方の後(氣)なり城近
くあり時城中より將馳逐逐と將ひ出縣波と川とありる
氣のぬけりるを言言困膠より糸帶振るるを足て想ふ

此の言一毒よ余ありは後より將津言保し似合
働きあり是國は中な所よとぬいありし中言困り城落る
ありし積ありとありし所ありし是より宗佐より山座あり
宗中も氣方も能合とありしありし中とるるに敵國
とありし話の氣のぬけりるに宗中より相州山中の城播伝
此の根の城と先右回前あり

義久は秀吉公より回贈を賜りしを将集院より保ち將津
も交なるとし数方を互にしりは成るゆや秀吉公の
命に叶ひち坂も是く威を振ひ致す將津家の障り成りし概

なりし義久彼を國に下して刑を要すしと云ふは是れ也
定て居城ありしに歸りては事未だありしを以て居城
の故奇風ありしを榮を揚ぐと云ふ其時義弘自らつら
て御舟らありしを側より舟より小姓佐助友三郎十之助の御舟
しり立ちしを肩先の切りしに腹を獲て居りしに
義弘の腹を乞はんとて其を討つるを死して討つるは則
小姓佐助の乞はるるを腹を乞はんとすわはるるを以て佐
成長の後佐助の力とて琉球國を勇急を獲て居りしに人あり

和州下流郡郡山の橋万石大和納言秀長小市御と申し此五木

征伐乃時平后山の腰の度みかけ知し一番の強を命とす年不
秀長は先を教をりしを年念の思ひ我者らと云ふ実に入
友を先達とて戦ふ敵味方乃鳴き叫ぶ夢も大山の海を
坤軸と稱すありし一轉し戦ひ友方東西に分ちて死骸を
積りしとありし血は流れて川となり紅葉の陰を以て紅の
霧を以てありし先年の勢ありし退き友方の如くありし
初年の舟より川に下りしと云ふ又力を得て友陣ありし
百騎より十騎十騎より一騎ありしと云ふ川を以てしりし
旗旗を東西に入遠く懸るる白日を掩りて死生知ら
ざる戦ひありし

敵方の弱を懐く、弱將下の徳士の風俗あり、吾ハ暗久重病を
此方の者々の中より、中後、是非の慮あり、と意ハ、吾速然
仕る後、相尋む、とあり

忠義の乞利隆元、いす、七歳の知童の時、白き稚子を秘蔵し
て、同義あり、或夜、孤に稚を懐ひ、隆元、聖物、稚を兄
らより、は指らされ、志を尋ねさせらる、と後園の築
此の後、稚子の相色あり、其色、つよ、瓶の元、ある、乞、難
受、お、瓶の所、存、あり、物色、ハ、元を、意、と、瓶を、殺、さんと
吉松葉を、多く、取、らせらる、と、母、公、是を、咎、あり、徳を、以、て

い、の、を、過、免、ら、る、と、隆元、返、答、あり、家、来、の、侍、者、喧嘩、張
い、と、一、方、を、切、殺、し、と、時、殺、せ、し、この、を、助、け、逃、れ、ん、や
喧嘩、あ、成、敗、と、首、より、の、大、法、あり、ハ、稚子、瓶、ハ、悪、介、也、と、波
さ、ま、り、と、家、来、遣、恨、し、と、ま、り、と、ま、を、死、殺、し、て、食、ら、ん、と、瓶、子
科、より、我、度、交、の、内、ハ、岳、と、稚子、ハ、家、来、瓶、ハ、家、来、と、な、る
瓶、を、助、け、逃、れ、理、あり、と、徳、を、返、し、と、名、將、と、成
り、人、ハ、七、歳、位、と、も、を、理、を、毎、ハ、あり、と、感、也、と、

保勢部九郎長氏、と、保、良、園、と、此、の、子、雲、居、宗、瑞、と、号、と、文武、の
良將、と、先、源、頼、朝、の、山、所、政、智、卒、と、後、常、云、と、百人、引、年、と、清水、浦、と、

乃盲法師をわづらふに 海に沈んて 何法をうまつゝいは
盲人皆四方に逃散す 其の中を 湯子間に用ひらるゝとい
ふに 亦云 小田ありて 二つ 喉命を 屠つ時 城中に
占のそのつ者も 尋ね 案のこゝ 阿の 其元の仕事に
て 氣をけく 占せんもの 之み 之をも 紙を 捲く物に

亦云 乃言士を教り 古一條の 法令に 其多十二條にわづ
乃 障阿の 物の中 文字の 其の 世懐に 入る人 目を 忘る人
も 多し 痛くも 癩くも 子 洲を 色を 文字 忘る なる 書
り 又 同く 亦十五條に 詠及 する人 是を 忘る 職に する人

その 一 一 常の 出會ふ 時 一 一言も 人の 胸中 知るもの
なり 亦十七條に 吾友を 求む 其の 智學文の 友なり 吾友
を 除く 其は 甚將 甚 富天の 友なり 是に 知る 其も 恥は
なり 亦 智も 吾友 なる 其 但 其も 先 法を 送る 人
其も 亦 人の 甚 甚 友なり 其も 亦 三人 亦 其も
必 我 師あり 其 甚 者を 撰り 是に 強し 其 甚 あり 其の 世
は 是を 改む 一 亦 古一條に 又 武弓 馬の 乃 常あり 記を
亦 及 其 友を 老し 武を 忘る 亦 古の 法 氣に 備へ
其 亦 亦 危なり 其

小田原城主小栗左兵衛五郎三十七年氏政一津田康令富田左近
と上使と〜あ〜と波上居る所は終つては終つては小栗の
首平家の人敷由井神東と東くあつたの羽言の驚きと東近
迹登〜〜と夜若神も大氣あるそのおとせよ岡東まじり
伸まじりい〜と叶ふま〜何所も〜と氣もむ〜と〜と時上居る
〜と〜と返り〜と〜と秀吉公い〜と〜と場悪あ〜と〜と
東去三月廿五日と十月十日と陣觸成三月朔日出陣と
極つり〜

小栗氏直和親の時若夜中九一一族お長士大將と集え居る
久〜と花城右助のり感佩するものあり我父子元より城を
枕とする意懐たれども大勢の十年の死を乞ふ忍びを敵
よとの扱ひよるを控へ恥を忘る軍門に降る者も日
よるに方〜離散〜身命を全くす〜我〜と扱〜と
〜と時〜と家を起し朝何とを旧好を忘るは死あつて足繼
危〜と恐〜と命〜と〜と皆涙を流〜と〜と詞お〜と和平調ひ〜
よる氏直より黒田義秀へ謝礼と〜と日光一文書の古刀白
貝と〜と陣堀源頼朝より孫倉將軍日記今の東繼を贈る
の志奉を贈る
者も後より日記を 神君よ〜と〜と小栗氏よ秘傳〜と化
家よあ〜と〜とあり 神君よ曉り〜と後世の飛龍と

とて友席に納るるなり

中国十州の太守尼子或親が備前晴久を家臣赤川亮之助の如く
よいうありしや極むる退くも如持祈禱其年曇目の如く
とひししつゝ退くも其の如く或親少備前西の其婦人
を連れきて君命およぐ富田の城へ連れし其時晴久室
ふまに汝野狐の如く臨しつゝ我臣下もそのかたを取付
しりふ屋を極むる退くも其の如く是れは急な了留ありし
赤川亮之助忽ち退くも其の如く時よ世野狐去りて其
夜再び赤川亮之助の家を中より我假令し車をもつての刑

に遇ふも退くも其の如く思ひきりつゝ晴久の命を首うは
幕下の諸大名を令しつゝ中国十州の極を將り其をんよの公
中を奈しつゝ其退くも其の如く是れ我れも数万の極の命を
取んりいんも歎くも其の如く流汗して去りつゝ

尼子晴久伯州の如く一時或里の家毎に二人三人つゝ病ひに
歸るを名く其如を問ふ如く其の如く皆死を避く山林に遁
を籠るも我れを夜前を病く如く時よ此程方如く
敵の如く死すも顧るを家になつとよ晴久深く恨
み其里を侵すも其の如く且其をよつゝ去り民大に悦び

是より其仁徳を福し〜人守り降す暗久伯州を討つ乃
基ひなり

永祿六年八月尾子右衛門督義久雲州白鹿城在城の時乞利
三家大軍を以て攻〜り是先鹿を〜り是先右州浪
山の垣屋豊前守より下知〜浪城も数百人掃〜城中
一堀入り城中も是と畏懼〜り是先お堀を〜り
八月九日土日吉川勢の元佐勢の幸あり〜山縣四所右衛門
尉枝布元佐伯右衛門守山縣元守あり〜り己にお堀の
間二三百とや〜りお堀の守あり〜り新堀の

上濃氣のとり色ハ互の實の間あり土洞と色色敵味方目
と目と色ハ互の實の間あり〜城の中〜り村久右衛門右兵衛乃木五郎
左衛門守の勝を以て安〜り吉川元守乃木五郎
右衛門守三浦孫三郎山縣宗右衛門守取合を元の中〜り
実合多〜り後橋実の中間あり〜り
戦〜り城の者叶〜りや思ひ〜り
物〜り元佐の埋め〜り吉田勢の元佐勢七城中のお堀
お合散〜り戦〜り

元佐勢十ヶ橋と一藩は福間元佐勢の元佐勢を以て実合

敵を討つ番に粟屋が先陣に就き松田大炊母と戦ふ其
項に粟屋流四郎伯州の少虎刑部と戦ふを命じ兜を帯び
流攻の森川と突合丹之雅樂元也雲國恒人湯島大炊母
切合波多野孫兵衛と敵を打ち三戸少左衛門雲州の村井左衛門
此合せ少左衛門負つて引退すぬ丹之孝俊も石州の赤松
左衛門と出合しと雙方負つて引退す九番に赤川赤松元雲州
乃山野末三郎と戦ふ三郎勝を奪ひて引退す十番に海舟
乃粟屋新三郎の山口平次を打ち留りて是を白鹿元中の十番
後といふ也

奥州伊達政宗中面武松万石蒲生飛澤吉氏御前生人下流
一、大將とて戦場に出陣し人衆を指揮するも
かきつと汁りを知りてはかからぬものあり魁人といふ時
少、大將のつらき其場ありては、いすも大將を足掻くもの
うまきなきなり大將を攻めぬと吐き卒計りかきつとと知
し、いすもをまうとのありては、氏御其言葉のそと侍を正地
る時を為さるる狼の鯨尾の曹を著る侍りて連七士卒下
先をとり先をとり働く旨を曹にたらしめねば、いすも
敵へらまらるる別氏御ありては、合戦も鯨尾の鯨の曹を
先をとり働くあり

氏卿と言麗陣の時余も子百入いし〜肥前名護殿も秀吉公
先照宮前田利家上松景勝あ〜山評定とて時蒲生氏卿
中とら〜いひのり〜山評定は朝鮮を以て柳名より下りて功取
ふ法〜いたり〜上の所苦勞も止み〜予も官初次者〜官位有
り中とら〜いひもまよも秀吉公氏卿と山隔る〜いひ

氏卿を天正十八年秀吉公山田系山系氏改征伐後奥州會津
ハ秀羽二州の要地あり〜無〜のこのま〜いひ〜無〜いひ
こ〜いひ〜會津の城主あり〜誰より〜中〜いひ〜秀吉公征伐後

是〜いひの〜せら〜いひ〜八九分ま〜いひ〜蒲生氏卿と河川も奥
の敷人〜いひの〜いひ〜あり〜物も先〜奥も秀吉公〜然〜いひ〜
いひ〜いひ〜あり〜守護〜中〜いひ〜賞あり〜小園〜いひ〜四圍
〜賜〜いひ〜あり〜氏卿と會津の地を〜いひ〜あり〜此
率長〜いひ〜秀吉公と東照宮〜いひ〜評定〜いひ〜秀吉公
奥も一藩〜いひ〜書入二藩〜いひ〜氏卿とあり東照宮〜いひ〜一藩氏
卿二藩〜いひ〜奥も一藩〜いひ〜いひ〜秀吉公東照宮と氏卿を
一藩〜いひ〜いひ〜いひ〜いひ〜氏卿とあり

肥後國肥田郡熊本の十五万石加後肥後守清正人〜いひ〜いひ

花田利家晩年より儒学を志し秀吉公薨去の後
松多秀家浪野幸長より余を誘ひて海濱に臨み節不
可奪の章を奉て活くも其後を譯し其年論を
讀み能通曉しぬ今の世にては徳を奉とせざるもの悲し
ハ不義に隔るんを嘆息清正年記の世にありて勇の
身を知らず其志偉あり

加後肥後守大國秀吉公の母君の姪婦に加後八重と
いふあり尾張國中村より出生し一多病五志の時病に
して其業あり母抱き秀吉公の母とす其子を生む

抱きたりと申し色々秀吉公は入山育ち知れり百山例
百仕を色々しく成長し元服は信長主計政より成程と血氣の
勇あり一敵の死に色々百番陣の内をよむ西播磨
一統より信長を勤王會張良を何むし朝鮮人を加後主計
と鬼にヤソこととやうに強ように肥後一國の内をよむ
天下の氣の面目を何し日蓮宗を考み洛陽に國を重
て天下を双の太伽藍を建てるに信徳を考め天下の人
民目を驚かし既より寺内より寺百十餘寺あり

加後清正肥後守第一揆退治の時片瀨ゆむを其紙を考め

て其の池をつきぬく是れ端也〜又池を合を成る
たつりつり平野を以て長安の色を以て大平の色を
留池河を以てあま〜端也〜余の池を以て社会
を以て然るん〜つり又大坂の最層は清正言を以て
〜將軍はあふる色法を以てせく〜清正河を以て
〜分別を以て今あり我の人人数を連〜福清の子
人人数を連連一日代り〜つり池田を以て播磨國を以
て其の端也〜さあ〜大坂領ん〜子間入〜福清
福清方〜云々〜つり〜同るあり〜清正を以て福清
ハハ氣を以て用よ〜つり〜あき者あり〜云々〜

加後清正の家は清軍のうげ言を中〜つり討果〜つり
清正の行は自今〜つりかけ〜つり信是地感〜つり大將
の端也〜つり是〜つり清軍の河法〜つり信是地感〜つり大將
人〜つり損を以て不〜つり大將の子を以て信是地感〜つり大將の端
〜つりあり〜つり信是地感〜つり清正を以て賢者の河法〜つり大將
あ〜つり〜つり其比秀あり〜つり大將凡人〜つり云々〜

清正天草あり〜働のほと氣を以て牧村を以て大捕尼あり〜つり今
天草〜つり松子を以て清正を以て信是地感〜つり大將若身〜つり

志津の嶽よりせりしうきしと云氏卿、牧村のて流る氏卿
乃云内々天草よそのりまきまわと相違仕交を造りて交
思ひしうき、寂早色しうきいおしと云牧村よ色を何ゆりやと
云氏卿の云志津の嶽を天下とけ目の合戦あり天草ハ一揆之
り色を志津の嶽より骨折しうきしと云天下七ヶ濱の場ハ
軽くありしと云

清正、慶長五年尾州清須の城の造營の対万松寺を籠籠と
せりしうき、今の極天神の境北あり、は清正の重の天守
岡を造りしうき、対熊田の方より大石を運りしうき、角石

たしらの大あを乞壇敷十枚しうき、包井あき大個ありしうき、ひ
北東よのせお六人まきしうき、川せり色しうき、呪小性の夢が年よ
綿繡を振しうき、敷十人を石のよよまあしうき、自刃し片瀧乃
流を拍其中央しうき、亦やり款をうしうき、清須の高人の酒
肴菓子あり賣りしうき、皆買取名物の徳人はあしうき、り色を
数方の名物人まき一夜の徳の本末は取つしうき、わんぢしうき、つま
をいし夢をぬき、暫時、番袴場まきしうき、つけしうき、以小性
たの英しき振ひを名しうき、心を勤しうき、いおしと云其此の
童の歌よれしうき、あり色と万松寺の花よりしうき、一枝わしこさ
るしうき、花よしうき、しうき、徳ひしうき

加賀中納言利長大聖寺の城を攻らる時種々丸より二町を隔て
る石堂よりあり利長此山より陣を居らる色々山に
右系籠る所をせよく積る種々丸を減みより
ゆより一こく強ひし備へ居地を致しゆり利長
り着せらるる 鯨尾の曹よりありそ早と恙あり右系
利長の陣の動搖せざるをんち ち換へしゆり前より某を
強く入る致しゆり 利長の側より居る危後を主人立り
お救へしゆり 利長の陣静りし川より 動搖せざる右
系よりしゆり致しゆり色々山より 立消しゆり色々山より

我運命是もあつと種々丸の櫓より 死に付くかきゆり
父子より討死し城端より 利長尋常の將あり陣中
隆動し敵と勝とありしゆり色々山より 利長
脱氣勝るありあり 其時の曹より今も加賀の系より
花田利長は上杉景勝と古小田系征伐の時小田より 其より
をんより多くの城を致し小田系より 秀吉公は獨
りし賞よりありし二將将みり色々山より 秀吉公は左の
人より将より死將より 先一城を屠りし後降系を致し
あは是あり (こよ) 左あきあり功を賞せしありし 将より

二將の... 八王守城を攻んとすを詔して一城の人を悉く難ゆ
めせしむるを秀吉公は其功を賞せしむ加藤九郎左衛門尉
人子孫のりるを秀吉公は子孫あるべし一 只殺せしむ感
あるを偏裨の將のりるを天下一に名する者を仁をさる
ありし人殺せしむを以て公をすを殺せしむるの於多
し秀吉公の言ふにあり長者の性をしりし

鳥津大隅守家久肥前守攻入爲弟の城を攻屠ししむるあり
龍造寺隆信大軍あり 押寄ししむ 家久はつりり
三石守ありしを城をありしむ 圍む家久は是を物も

其以の合戦を先陣とし 具をお圖し物も 一
定めし秋の野を討朝露深く物の色も分るる家久机小
倚り晴る世傳や朝日如く晴ししむるよ子のふせ御豊
久十歳ありしむを近分け天晴武者極み只上帯の
結ひわくしむるものそしむ 結ひ垂し 脇指を抽し其端を
切し後より波若軍より勝りお死すは 世占帯我解
し 今日の日軍は屍を戦場よりさるるんは 鳥津の家小生
きしむるもの思ひ切し 敵も死す我も其泉は 恨ん物を
としひもつは 具吹立させ先は 隆信の旗中礼をさる
取れし色は 隆信のあり 返せし下知し 逆ら 端を皮


~~~~~付九七の色~~~~~

増津名底取義は同又七節豊久唐~~~~~地勝治色と~~~~~  
長束方新方納言利益一山経を~~~~~東、利益対面~~~~~と~~~~~  
日向薩下は山麓入~~~~~下と山向成~~~~~大麓中~~~~~四万石斗  
山麓い~~~~~物~~~~~是と意津~~~~~山加増~~~~~秀者公~~~~~下  
~~~~~新~~~~~折~~~~~内府~~~~~通~~~~~陸~~~~~念~~~~~然~~~~~と~~~~~信~~~~~い  
増津~~~~~名~~~~~高~~~~~儀~~~~~と~~~~~方~~~~~麓~~~~~と~~~~~相~~~~~内~~~~~府~~~~~入~~~~~と~~~~~系~~~~~以~~~~~由~~~~~中~~~~~入~~~~~い
~~~~~信~~~~~内~~~~~府~~~~~今~~~~~物~~~~~と~~~~~山~~~~~向~~~~~入~~~~~と~~~~~山~~~~~中~~~~~い~~~~~又~~~~~大~~~~~麓  
大納言~~~~~と~~~~~系~~~~~以~~~~~通~~~~~と~~~~~山~~~~~向~~~~~い~~~~~と~~~~~色~~~~~と~~~~~  
内府~~~~~方~~~~~別~~~~~と~~~~~

~~~~~(~~~~~中~~~~~先~~~~~秀~~~~~頼~~~~~公~~~~~の~~~~~法~~~~~代~~~~~初~~~~~の~~~~~戦~~~~~の~~~~~地~~~~~勝~~~~~と~~~~~一~~~~~層~~~~~と~~~~~  
~~~~~と~~~~~と~~~~~い~~~~~ふ~~~~~仲~~~~~り~~~~~い~~~~~い~~~~~内~~~~~府~~~~~(~~~~~山~~~~~)~~~~~築~~~~~と~~~~~と~~~~~山~~~~~向~~~~~野~~~~~澤~~~~~山~~~~~石~~~~~田  
治部~~~~~少~~~~~前~~~~~と~~~~~と~~~~~山~~~~~向~~~~~所~~~~~来~~~~~平~~~~~調~~~~~和~~~~~と~~~~~と~~~~~山~~~~~向~~~~~地~~~~~と~~~~~と~~~~~山~~~~~向~~~~~加~~~~~増~~~~~と~~~~~極~~~~~り  
い~~~~~東~~~~~照~~~~~宮~~~~~と~~~~~利~~~~~家~~~~~の~~~~~山~~~~~向~~~~~分~~~~~と~~~~~と~~~~~作~~~~~ら~~~~~色~~~~~と~~~~~と~~~~~後~~~~~増~~~~~津~~~~~又~~~~~子  
國~~~~~と~~~~~と~~~~~大~~~~~坂~~~~~(~~~~~山~~~~~)~~~~~新~~~~~城~~~~~物~~~~~と~~~~~と~~~~~山~~~~~向~~~~~礼~~~~~と~~~~~と~~~~~山~~~~~向~~~~~色~~~~~と~~~~~と~~~~~り~~~~~る

~~~~~後~~~~~を~~~~~冬~~~~~三~~~~~州~~~~~の~~~~~方~~~~~と~~~~~今~~~~~川~~~~~治~~~~~部~~~~~と~~~~~捕~~~~~原~~~~~義~~~~~元~~~~~と~~~~~織~~~~~田~~~~~信~~~~~長~~~~~を~~~~~掃  
~~~~~伏~~~~~ん~~~~~と~~~~~其~~~~~用~~~~~意~~~~~類~~~~~と~~~~~あ~~~~~り~~~~~か~~~~~と~~~~~と~~~~~山~~~~~向~~~~~其~~~~~治~~~~~後~~~~~府~~~~~の~~~~~所~~~~~入~~~~~小~~~~~童  
小~~~~~玉~~~~~の~~~~~ま~~~~~と~~~~~秋~~~~~を~~~~~現~~~~~ひ~~~~~と~~~~~と~~~~~山~~~~~向~~~~~と~~~~~と~~~~~山~~~~~向~~~~~色~~~~~と~~~~~と~~~~~山~~~~~向~~~~~か~~~~~き~~~~~と~~~~~と~~~~~山~~~~~向~~~~~の~~~~~果  
そ~~~~~か~~~~~あ~~~~~り~~~~~と~~~~~と~~~~~山~~~~~向~~~~~色~~~~~と~~~~~と~~~~~山~~~~~向~~~~~流~~~~~と~~~~~と~~~~~山~~~~~向~~~~~町~~~~~と~~~~~山~~~~~向~~~~~色~~~~~と~~~~~と~~~~~山~~~~~向~~~~~一~~~~~色~~~~~と~~~~~と~~~~~山~~~~~向~~~~~混



ひしとあり又或夜雨とぞ降るは秋さのし原ふささし  
よ城中二之丸の花畑よ女の髪うしあるよのそそ悲く  
さしあしわささよ柏ふをりけり視入其跡より數十人  
の女の髪うしるかあやあやいよとわらわらどやと笑  
ひりりぬ虫宿の土小倉たふささお宿目録あやいよ思ひ  
大勢松崎とさりい暮ひりささ何ものもさしあはれ  
狸の尻尾あしんと中々ぬ後よ思ひ合ささ大持義元  
尾州宿海より討死ありあひい氣表を知らさるる

女飛女肥豊元おと國方吉龍遠寺隆信を今山の夜討り

まうと面も振ふは切り入るは豊後勢降るさ降るさ十方り  
逃散り討りよの数を知らは鴨打降るる納富也るる  
と西の口より攻入る千変万化いり戦ふ初よ鴨打り子た也  
大丈右衛門を御九郎お死生知らはる戦ふ御守十郎系  
大膳を林武源お捕籠知り組り首を斬り副将久盛を本陣  
大膳と討り首を切り忠臣を押し降信を攻とらる  
うら豊後勢討りよの具数を知らは肥後の國人城破り  
秘めたる跡ありあき勇士ありいりいりいりいり  
柄長左馬允成松大膳を生捕りぬ去るは豊後の徳勢  
善く取乞いりり肥後いりり逃りきぬ







治とら付しきあり

勝家殺中奥津の城を十國の人數葉田勝家惣大将より西巻  
く時上杉景勝殺後より後巻を天神山より人數出く  
ると葉田伊勢佐久守言書依り内藤丹を日先を降す  
利家と信分り變大將の葉田内藤より中内藤より  
の出入は時色た何事をもし出づのよし其外あり  
く心お魂しむるは

葉田常よきりち相承を末孫のりてく焼死く  
いふり終るを淺井と信長と退治くく死骸を好み  
あひに悪く思ひありまあり相承をむかりし母あり葉田  
と焼死くくあり葉田小虎の城へ歸り天守のお重目の捕り  
を藪の小夜具を忘る思く四方を足出くくあり

古江河波隈攻伊豫軍國と土州と依り言知山の信万石長首我  
源元親紀州湊雜賀を數万屋くし加秀老公三河の陣の流  
あり紀州泉州中合大坂表へ可取公先四國より人數二万  
あり後と頻りよあり隈攻を執着名海く元親を  
河州後いすく名徳一たたをけり答よお極光福富甚き場



を紀州と名をさすたの個をさす上の場とす元僧を塚へ也  
つとを流地を雅を貫洞とや祝禱舟楫大急あり船よりいそ  
と 東照宮の中庭をん とき 後色 和泉江橋をたす門二人を  
飛脚よりさきいそれ前より奉者より舟井掃部政をりり  
元親の快と船多あり波表より板は大形を個々討つる  
小成より板い言のたか十日より前より舟より東西  
より板舟中より船籠及び上方勢取軍よりきり目元  
より波念を楳互のふらぬあをりしきり山越りたを  
香老より三河表より運 唐忌成りぬたのふらぬ啼啼せし  
より香老公より運つより大將あり

長曾代親元親より小田系陳の時大急丸より船より一堀帆を掛  
きり大船池をたす船大將よりいそれ舟をたすいそれ  
しと元親より一たをたすつし船櫓を二百人集りり石大矢  
二挺指又目玉の強地を百挺弓百張池二百中長刀六中六矢  
の道具数限あり入る板屋時を待つ一たをりり船を櫓を  
立死を舟具を吹船子を長柏子を掃へ端鳴りり叫叫て城  
南表へ押入る諸陣より先きを石を浪の子の櫓を二石  
大矢をりり舟船より要害を舟被り敵持口を逆りり板  
時の夢を奉りりし中陣より具を吹之諸陣一同より



鯨皮の夢をあけ續致しと一書く三時斗の地帯一と肝魂  
七滴の汁あり以日元親(香老公)より山登員の内使者あり  
今夏大船の子柄日中つて完(一)と一と山登大(一)あり  
六右衛門の一働(一)と一と熊海の浦は引丸毎日天(一)あり  
押(一)け入(一)と一と此時六右衛門を西(一)と一と山登大(一)あり  
い(一)と一と山登大(一)ありと一と山登大(一)あり

長曾我元親を息連系家中の子供を集免忌豊城中  
城(一)と一と山登大(一)ありと一と山登大(一)あり  
及び寺の信(一)と一と山登大(一)ありと一と山登大(一)あり

在(一)と一と山登大(一)ありと一と山登大(一)あり  
待(一)と一と山登大(一)ありと一と山登大(一)あり  
い(一)と一と山登大(一)ありと一と山登大(一)あり  
目(一)と一と山登大(一)ありと一と山登大(一)あり  
い(一)と一と山登大(一)ありと一と山登大(一)あり  
と(一)と一と山登大(一)ありと一と山登大(一)あり  
勤(一)と一と山登大(一)ありと一と山登大(一)あり  
中(一)と一と山登大(一)ありと一と山登大(一)あり  
の(一)と一と山登大(一)ありと一と山登大(一)あり  
と(一)と一と山登大(一)ありと一と山登大(一)あり



さしよの在東一々其訓は先の基と成るなり

野州結城の城主結城中納言羽柴秀康卿は徳島安石の城攻  
一番より蒲生氏郷宗田利長あり二番は一は秀康卿は  
陸奥で成改水野和泉守忠重あり三は秀康卿は  
の押上への時秀氏卿利長より一は居城より一は  
のさしよのいふ用よりあり其時秀康卿は年十七歳に  
成合戦のものに合をとりて念は思ふ居候は候しを  
成改深く感へ流石 東照宮のいふあり 今日より  
に合ありとて居候候しと候し流石なり

東照宮は徳島に在りて其意は秀康卿のいふあり候  
しとあり秀康卿は我意あり候し心は皆秀康卿のいふ  
あり候しとありとあり

中國の十三万石藩田に居候の城主毛利中納言吉江輝元は  
永禄七年三月下旬十二歳のの時家老をとりて定む候し  
元就公の意の如く是より其意の杖氣と成り候し一は  
の陣あり候元就公は元就公は一は其意の杖氣と成り候し  
一は元就公の意の杖氣と成り候し一は其意の杖氣と成り候し  
一は其意の杖氣と成り候し一は其意の杖氣と成り候し







信忠を破卓し人殺掃ひし物とて馬よ来る時最のよの洞法  
とて論る證を以て口取の証を忘るふ證は口取証を破り色血の川  
口取後(と)て抜ちし盾先より掛り多し信忠が草羽殿を以て  
忘るるがよき方ゆゑのよは切先より盾先より草の陰より切  
きけり道よりち(夜)りきのやうは脊中血は味(と)て素より氣  
子の恙大將の色を振返り極小地付るる由り初より口取の刀を人  
斗きけり海より一刀の切落されしとて(時)あり外を力信長  
公お侍の義元たふ字地より良智嚴勇の恙大將の色を危  
を証(と)して(と)節(と)め(と)悔(と)り(と)さ(と)る(と)あ(と)る(と)し(と)ん(と)ん(と)

信忠を信長公の仕舞勢を討きし時敵を自ら味方逃ちし付  
信忠通長とてたふ敵小退るる色より(と)あ(と)り(と)色(と)は(と)山(と)中(と)の(と)洞  
元のより(と)り(と)中(と)の(と)食(と)を(と)人(と)所(と)し(と)る(と)信(と)忠(と)通(と)長(と)の(と)食(と)所(と)居(と)る  
只(と)引(と)返(と)る(と)も(と)念(と)あ(と)る(と)向(と)ひ(と)の(と)洞(と)元(と)の(と)内(と)より(と)食(と)所(と)居(と)る  
極(と)小(と)な(と)る(と)し(と)何(と)も(と)し(と)り(と)ふ(と)り(と)く(と)色(と)を(と)首(と)より(と)取(と)り(と)し(と)て  
是(と)を(と)討(と)取(と)る(と)色(と)と(と)し(と)通(と)長(と)の(と)よ(と)ら(と)食(と)を(と)討(と)り(と)し(と)何(と)の(と)用(と)も  
り(と)ま(と)り(と)き(と)と(と)思(と)ひ(と)し(と)色(と)も(と)信(と)忠(と)の(と)付(と)あ(と)る(と)押(と)し(と)る(と)極(と)小(と)な(と)食(と)所(と)  
首(と)より(と)し(と)り(と)取(と)り(と)後(と)信(と)長(と)首(と)を(と)取(と)り(と)し(と)時(と)より(と)た(と)の(と)食(と)所(と)首  
の(と)恙(と)大(と)將(と)の(と)首(と)を(と)信(と)忠(と)が(と)侍(と)の(と)恙(と)大(と)將(と)の(と)首(と)を(と)取(と)り(と)し(と)る(と)一(と)し(と)る(と)一(と)し(と)る(と)



甲信を三州のちさ百万石武田四郎勝頼と高天神の城法  
くして信玄と夜巻あつて無を勝頼攻め是言勝あ  
んを古きものり果して荒とて昔徳川の敗軍あり

勝頼陣の時為さりの斗あり高野の夜をさのむとわさ  
出陣お法師も馬のあつちよ夢せめく徳軍是を  
んそ羊老くを戦場よ出まきもとりつは時  
四十六あり首の白揃いも是年山時と足田四十六老  
とひりり今もふ審よおりあり

勝頼甲州取崩の時勝頼父子のり方志きし流川左近将監一益先自  
て國中を尋り山梨郡田野の穴の奥天目山の麓を居人の男女六十  
人より中を押しあつちよ皆を糧よ以て働りお自由人のよ  
あつて發討反首よの皆に痛く物も変地の百姓人皆其満の  
逆色よも皆を首を脱ぎて城攻中を敵攻と地よつ十一札を通り  
流し流川の士卒是をんく己おを海堀へ何と懸懸よ礼をすん  
と四六百姓を中河の城の中へ居形勝頼父子の首をたれ敷十代の  
の首をたれしははりて流し流しを流し流しを首をたれ奉勝  
頼の首をたれを城へ夜に奉勝へおり実極よ極あり



勝頼、東照宮四前奉召氣加治色於不威亡也、を詳に措きを多し  
台池を志す、この意を勝頼、も深き事なき、ゆゑに母、勝頼の娘を  
せしむ、後の世に始とせしむ、其の事、はるかに傳へる、其の地を措き  
因り、自意元年福葉母、はるかに傳へる、其の地を措き、  
絶倫の事、書す、その事、はるかに傳へる、其の地を措き、  
其目、お渡り、しては出別、東照宮、はるかに傳へる、其の地を措き、  
其年、その事、其目、はるかに傳へる、其の地を措き、  
其事、はるかに傳へる、其の地を措き、

近世外史卷之三 終



